話題の人物が二人の待遇表現に関する分析

丸元 聡子[*1]，井佐原　均[*2]
[*1]計量計画研究所，[*2]情報通信研究機構
smarumoto@ibs.or.jp

１．はじめに

待遇表現は、日本語の特徴の一つであるが、待遇表現の誤用や混乱がしばしば、指摘されている(林　1974、菊池　1997)。待遇表現の誤用による感情のもつれや誤解を防ぎ、コミュニケーションを円滑に進めるためには、待遇表現を適切に使うための教育が必要であると考えられる。この際、人々が、どのような発話状況の場合に、どのような待遇表現を使用している(もしくは使用していない)のかという実態についての知識があれば、教育を効果的に行うことが期待できる。

待遇表現とは、話し手が話題の人物との関係を認識し、その人物をどのように待遇するか、すなわち、高めるべきか高める必要がないのかを判断し、判断の結果、得られた待遇意図と対応する語形の表現を表出したものである(菊池　2003)。

ここで待遇意図の決定には、複数の要因がある。例えば、ブラウン・レビンソンのポライトネス理論(Brown and Levinson 1987)では、発話状況に応じた適切な待遇表現を用いるためには発話に関わる人物間の社会的上下関係、人物間の親疎、および各人物の体面に対して発話意図が及ぼすリスク、等の要因を考慮する必要があることが示されている。このような待遇意図決定に関わる複数の要因のうち、上下関係に関するものは、待遇表現に関するいずれの研究でも何らかの言及があり、さらに、南の研究(南　1987)では、複数の要因の中でもブラウン・レビンソンの社会的上下関係に相当する上下関係の要因が優勢であることが示唆されている。

そこで、本研究では、待遇表現選択要因として、上記の社会的上下関係を取り上げる(以下、単に“上下関係”と呼ぶ)。なお、関係の上下については、必ず決定できるものとし、さらに、同等の関係は扱わない。

以上をふまえ、本研究では日本語母語話者の発話文において、どのような上下関係の場合にどのような待遇表現が使用され、また、従来、誤用として指摘されている表現がどのような上下関係の時に現れやすいのかについて調査することを目的とする。具体的には、単文ではかなり難しい発話状況であると考えられる、話題の人物が 2 人、すなわち発話に関わる人物が 4 人の場合を対象とする。そして、その 4 人の関係について想定しうる全ての上下関係を指定した上で、調査対象者に適切と考える表現を自由記述してもらい、これを分析した。このように発話に関わる人物の上下関係を網羅した上での待遇表現の使用実態調査は、従来、ほとんど行われてきていない。

２．アンケート調査

2.1　調査対象者

調査対象者は、関東在住の日本語母語話者 40 人(男女各 20 人)である。

ある程度以上、実際に待遇表現を使用していると考えられる人々の実態を調査するため、調査対象者の年齢を 20 代以上に限定した。このため、調査対象者 40 人(年齢層は 24 歳～69 歳)のうち、32 人が 30 歳以上である。

2.2　調査対象となる表現

本研究では、話題の人物が 2 人現れる表現を検討対象とする。すなわち、表現選択に関わる人物は、聞き手(L)、話し手(S)、話題の人物 A、話題の人物 B の 4 人である。

発話意図としては、次の条件を満たすものとして、表 1 の 12 通りを用意した。

発話意図の条件：

- 人物 A、人物 B の 2 人が登場する
- 人物 A、人物 B のどちらが上の立場になっても表現できる
- 主語は常に人物 A とする。
- 補語は常に人物 B とする。

なお、ここでは、補語とは主語以外の格要素を指すものとする。

表１　発話意図

意図 No.	発話意図
意図 01	A が B に言った。
意図 02	A が B から聞いた。
意図 03	A が B に土産物を上げた。
意図 04	A が B から土産物をもらった。
意図 05	A が B のところに来た。
意図 06	A が B のところに会いに行った。
意図 07	A が B を家まで送った。
意図 08	A が B に回答した。
意図 09	A が B に電話をした。
意図 10	A が B に写真を見せた。
意図 11	A が B に説明した。
意図 12	A が B の車を見た。

2.3　調査方法

前節で示した 4 人の上下関係について、全てのバリエーション（4!=24 通り）を用意する。各バリエーションは、「A＞B＞L＞S」のように表記し、不等号“＞”の左側に現れる人物ほど、上下関係において上であるとする。上の例は、人物 A が最も上であり、話し手が最も下であることを示す。

調査対象者には、各発話意図に関し、上述の 24 通りの上下関係の各々について、上下関係を考慮した上で適切と考えられる待遇表現を 1 つ以上回答するよう求めた。ここで、調査対象者は、自分が話し手(S)の立場に立った場合の発話文を記述する。なお、この場合の“適切さ”は、自分が使用するか否かではなく、規範的に正しいと考えているものを指すこととした。回答は自由記述とし、発話意図が変わらない範囲内で自然な表現となるよう、言い回しや語彙の変更は認めている。

自由記述方式としたことで、選択式に比べて、より実態に近い姿が明らかにできると考える。

３．調査結果と考察

本章では、前章に記した方法で得た文（総数 12,485 文、以下“レコード”と呼ぶ）のうち、規範的でないとされる表現、および規範的に誤りとはされていない表現に関する統計を取り、その特徴等について議論する。

3.1　規範的でないとされる表現に関するもの

待遇表現の誤用は、１）語形上の誤り、および２）運用上の誤りに大別できる。

3.1.1 語形の誤り

語形の誤りとは、語形が待遇表現として規範的でない表現の使用を指す。これらに該当する表現の出現数は表 2 の通りである。

着目している表現のうち、「＋レル」を含むものは二重敬語である。なお、このような語形上の誤りのいずれかを含む回答を 1 つ以上した人の人数は 31 人であった。

表 2 から、出現しやすい語形の誤りと、そうでない語形の誤りがあることが分かる。まとめて扱われることの多い「お／ご～される」のうち、「ご～される」の方が出現しやすい傾向があると言える。また、二重敬語「お～になられる(お～になる＋レル)」は頻出するが、「ご～になられる(ご～になる＋レル)」は少なく「ご覧になられる」しか出現していなかった。発話意図にはサ変動詞・和語動詞の両方が含まれており、語彙の言い換えは認めているため、発話意図以外に誤用の原因がある可能性が考えられる。このことから、接頭辞「お」を含む表現と接頭辞「ご」を含む表現とでは語形の誤りの現れ方に違いがある可能性が示唆された。

表 2 語形の誤りとされる表現の出現数

意図 No.	着目している表現	出現数
意図 01	お～される	6
	おっしゃる＋レル	21
意図 02	お～になる＋レル	32
意図 03	お～になる＋レル	13
	下さりました	2
	下さる＋レル	1
意図 04	お～になる＋レル	12
意図 05	いらっしゃる＋レル	9
	お～になる＋レル	9
	見える＋レル	1
意図 06	お会いに	6
意図 07	お～される	10
	お～になる＋レル	44
	お送りになさった	1
	ご～される	2
意図 08	お～される	4
	お～になる＋レル	12
	ご～される	23
	ご～なさる＋レル	2
	なさる＋レル	5
	ならられる	1
	下さりました	1
意図 09	お～される	9
	なさる＋レル	4
意図 10	お～になる＋レル	58
意図 11	ご～される	72
	ご～なさる＋レル	5
	なさる＋レル	3
意図 12	お～になる＋レル	6
	ご覧になる＋レル	44
	合計	418

3.1.2 運用の誤り

運用上の誤りとは、語形は正しいが、発話に関わる人物間の上下関係と整合しない表現の使用を指す。本研究では、上下関係と、それに対応する待遇表現の規範として、白土ら(白土　2005)が、複数の文献から得たルールを用いる。このルールによると、A>B かつ A>S では尊敬語が使われることが期待される(この上下関係を以下、“尊敬語の使用が期待される上下関係”と呼ぶ)。また、B>S>A では、謙譲語が使われることが期待される(この上下関係を以下、“謙譲語の使用が期待される上下関係”と呼ぶ)。

(1) 尊敬語の使用が期待される上下関係での運用の誤り

尊敬語の使用が期待される上下関係(すなわち、A>B かつ A>S)において、謙譲語、謙譲語＋尊敬語の出現数はそれぞれ 145 レコード、29 レコード(この上下関係における全レコード中の割合は、それぞれ 3.5%、0.7%)であった。これらは、尊敬語という意識で謙譲語を用いている可能性がある。このような謙譲語を含む誤りを 1 つ以上回答した人の人数は 27 人であった。表 3 は、これらのレコ

ードにおける、発話意図別の各表現の出現数を示す。

表 3 尊敬語の使用が期待される上下関係での謙譲語を含む表現の出現数

	意図 No.	着目している表現	出現数
謙譲語	意図 01	～ておる	7
		お～する	1
		申し上げる＋おる	1
		申す＋おる	3
	意図 02	～ておる	6
		お～する	7
		伺う	9
		致す	1
	意図 03	差し上げる	15
	意図 04	～ておる	1
		伺う	1
		頂く	40
		頂戴する	5
	意図 05	参る	2
		伺う	1
	意図 06	お～する	1
		お伺いする	1
		参る	1
		伺う	1
	意図 07	お～する	4
	意図 08	ご～する	2
		致す	3
	意図 09	お～する	1
		差し上げる	1
		致す	5
	意図 10	お～する	22
		お～頂く	1
	意図 11	ご～する	1
		致す	4
謙譲語＋尊敬語	意図 01	おっしゃる＋おる	2
		申す＋レル	2
	意図 03	差し上げる＋いらっしゃる	3
		差し上げる＋レル	2
	意図 04	頂く＋レル	4
	意図 05	参る＋レル	1
		伺う＋レル	1
	意図 06	お～する＋レル	1
		参る＋レル	1
		伺う＋レル	2
	意図 07	お～して＋下さる	1
	意図 08	ご～なさる＋おる	1
		なさる＋おる	1
	意図 09	お～して＋下さる	1
		差し上げる＋レル	5
	意図 11	ご～して＋下さる	1

表 3 は尊敬語の使用が期待される上下関係において、謙譲語：「頂く」の使用が多いことを示す。従来は、「先生がご講演して頂く」のように、補助動詞として「頂く」が現れる「お／ご～頂く」の用法について、誤りが多いことが指摘されてきた。今回の結果では、この用法は「A 社長が B 部長に写真をお見せ頂いたそうだよ」の 1 例しか出現していないが、「社長が B 課長からお土産物を頂いたそうです」のような本動詞「頂く」を尊敬語として用いる誤りが頻出している（この上下関係における発話意図 04 全レコード中の割合は、11.1%）。本動詞としての用法は、主語と述語の関係が捉えやすいはずであるにも関わらず、謙譲語か尊敬語かの認識に問題がある。これらのことから「頂く」は特に習得が難しい語彙である可能性が高い。誤用が頻出した理由としては、表 4 に示した「頂く」「下さる」の本来の意味を認識していないこと、あるいは、これらの語が用いられる構文を正しく理解していないことが考えられる。

表 4 「頂く」と「下さる」の比較

	種類	意味	構文
頂く	謙譲語	もらう	自分ガ(目上)ニ／カラ　頂く
下さる	尊敬語	くれる	(目上)ガ　自分ニ／Xヲ　下さる

(2) 謙譲語の使用が期待される上下関係での運用の誤り

謙譲語の使用が期待される上下関係（すなわち、B>S>A）において、尊敬語、尊敬語＋謙譲語の出現数はそれぞれ 39 レコード、1 レコード（この上下関係における全レコード中の割合は、それぞれの 1.8%、0.04%）であった。これらは、謙譲語という意識で尊敬語を用いている可能性がある。このような尊敬語を含む誤りを 1 つ以上回答した人は 9 人であった。表 5 は、これらのレコードにおける発話意図別の各表現の出現数を示す。

表 5 謙譲語の使用が期待される上下関係での尊敬語を含む表現の出現数

	意図 No.	着目している表現	出現数
尊敬語	意図 01	お～になる	3
		おっしゃる	1
		される	1
		れる	1
	意図 02	れる	1
	意図 03	される	1
	意図 04	いらっしゃる	1
		れる	1
	意図 05	される	1
		れる	1
	意図 06	れる	3
	意図 07	れる	1
	意図 08	お～になる	1
		される	8
	意図 09	される	3
	意図 10	お～になる	4
	意図 11	される	4
	意図 12	おっしゃる	1
		ご覧になる	1
謙譲語＋尊敬語	意図 05	参る＋レル	1

このタイプの誤りは、待遇意図決定後に対応する表現選択を行う段階で誤りを生じている可能性

の他に、誰を高めることが適切か分からなかった、すなわち、待遇意図の決定の時点で混乱を生じている可能性が考えられる。

従来、あまり指摘されていなかったが、謙譲語の使用が期待される上下関係で尊敬語を使用する誤りが出現していた。このことから、このタイプの誤りに対しても、教育上の配慮や、格解析など言語処理の際の配慮が必要であると言える。

(1)(2)の結果から、尊敬語のつもりで謙譲語を使っていると考えられるものの方が、出現レコード数、使用者数とも多い。よって、「尊敬語と謙譲語の混乱」については、謙譲語のつもりで尊敬語を使っているものより、尊敬語のつもりで謙譲語を使っていることが多いことが示唆された。こういった尊敬語と謙譲語の混乱は、主語が不明確になるため、待遇表現の体系をゆるがす深刻な問題として指摘されている(菊地　1997)。

3.2　規範的に誤りとはされていない表現に関するもの

本節では、現在、規範的に誤りとはされていない表現のうち、地域による使用頻度の違いが指摘されている語彙や、難度が高いとされる表現など、やや一般的でない表現の使用傾向を見る。

3.2.1 やや一般的でない語彙の使用傾向

「いらした」については、「いらっしゃった」の縮約形であり、独立して活用する待遇表現ではなく、教育の対象になる可能性は低いが、東京周辺での使用が多いことが指摘されており(菊地 1997)、規範的に問題とはされていない。「いらした」の出現数を「いらっしゃった」と比較する。

「いらした(～てらした)」「いらっしゃった(～てらっしゃった、いらっしゃる)」が含まれるレコード数は、それぞれ、90 レコード、224 レコードであった。これらのいずれかを 1 回以上、使用した人の人数は 28 人であった。それぞれの語彙の使用状況は表 6 の通りである。

表 6 「いらした」「いらっしゃった」の使用状況

使用語彙	女性	男性
「いらした」を使った人数（「いらっしゃった」との重複あり）	11 人	2 人
「いらっしゃった」を使った人数（「いらした」との重複あり）	11 人	11 人

「いらっしゃる」とどちらもが使用可能な状況下で、女性の半数以上が使用していたことから、女性においては、適切な待遇表現として認識されている可能性が高い。また、男性は使わない傾向があると考えられ、「いらした」の使用に関して、性差が見られた。

3.2.2 難度が高いとされる表現の使用傾向

前述したルールに従うと、B>A>S という上下関係においては、二方面敬語が使用可能である。これは、「A 部長が B 社長にお土産を差し上げていらっしゃいました」のように、補語である人物 B を謙譲語「差し上げる」で、主語である人物 A より相対的に高めると同時に、人物 A を尊敬語「いらっしゃる」で話し手より高めている。表現としては、一発話文中に尊敬語と謙譲語の両方が出てきており、前述の運用上の誤用(表 3、表 5：謙譲語＋尊敬語)と同じ語の組み合わせであるが、主語(人物 A)、補語(人物 B)の両方を話し手より高めているため、待遇表現としては問題がない。このような二方面敬語が回答中に見られた。二方面敬語が使用可能な上下関係(1,985 レコード)中、二方面敬語が使用されていた表現は 97 レコード(4.9%)であった。また、この上下関係において、二方面敬語を 1 回以上回答した人の人数は、20 人(男性 8 人、女性 12 人)である。さらに、尊敬語と謙譲語とが一発話中文に同時に現れる 126 レコードのうち、76.9%が二方面敬語であった。

二方面敬語は従来、まれな表現として指摘されているが、二方面敬語を二方面敬語と認識した上で使っている人がいることが示唆された。

4．おわりに

人々がどのような上下関係の場合に、どのような待遇表現を使用しているかという実態調査を行い、誤用の現れる傾向を見た。その結果、特に謙譲語「頂く」で混乱が大きいことが分かった。

今回の調査では、発話意図、発話状況が非常に限定されたものであったため、待遇表現に関する使用実態の詳細を明らかにするためには発話意図を増やすこと、また話題の人物が同格である場合や、話題の人物が少ない場合の表現に対する検討を行うことが必要であると考えている。

文　献

Brown, P. and Levinson, S., Politeness - Some universals of language usage -, Cambridge, 1987.

菊池康人,『敬語』, 講談社, 1997.

菊池康人, 敬語とその主な研究テーマの概観,『朝倉日本語講座 8　敬語』, 朝倉書店, 2003.

国立国語研究所『日本語教育指導参考書 18　敬語教育の基本問題（下)』, 大蔵省印刷局, 1992.

白土保, 丸元聡子, 村田真樹, 井佐原均, 日本語発話文に含まれる敬語の誤用を自動的に指摘するシステム―プロトタイプの開発―, 言語処理学会第 11 回年次大会発表論文集, 2005.

林四郎, 南不二男編集,『待遇表現講座 1 敬語の体系』, 明治書院, 1974.

南不二男,『敬語』, 岩波新書, 1987.